

「エルサレム入城」

2015年11月20日

ルカによる福音書 19章 37節～44節。イエスがオリーブ山の下り坂にさしかかられたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。「主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように。天には平和、／いと高きところには栄光。」すると、ファリサイ派のある人々が、群衆の中からイエスに向かって、「先生、お弟子たちを叱ってください」と言った。イエスはお答えになった。「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。」エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」

主イエスは子ろばに乗ってオリーブ山の下り坂にさしかかった。弟子たちと従う群れは、ガリラヤでの主イエスの力強い奇跡を思い起こし、喜びに満たされた。今から、あの奇跡の力を発揮し、ローマからの独立、解放をもたらしてくださると期待したのである。彼らは声高らかに「主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように。天には平和、／いと高きところには栄光」と神を賛美した。あまりの歓声に、ファリサイ派の人々は、主イエスに「先生、お弟子たちを叱ってください」と求めた。主イエスの言動に敵対していたファリサイ派の人々は、民衆が支持していることへのいら立ちと怒りを露わにしたのであろう。また、過越祭には大勢の巡礼者が集まる。ローマに反逆する暴動でも起これば、総督ピラトの軍隊によって鎮圧されることを恐れた面もあったのだろうか。主イエスは「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす」と答えている。高揚し興奮した民衆を沈黙させることはできない。彼らを沈黙させれば、石が叫ぶという。石が叫ぶことはない。しかし、崩壊するエルサレム神殿の石の叫びを聞けと言っているようである。

主イエスはエルサレムに近づき、街が見えた時、泣かれた。エルサレムは政治、経済、宗教など、あらゆる分野において中心地で、外見は豊かできらびやかであった。しかし、主イエスの目には罪にまみれた虚栄の街に見えたのである。その罪に対して、涙を流された。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」平和への道を、神の訪れてくださる時をわきまえていない。だから、敵が堡壘を築き四方から攻め寄せ、人々を地面に叩き付け、エルサレム神殿の石は崩壊してしまう、と予告する。これは、紀元70年にローマ軍によって、無残に陥落した事後予告の言葉であろう。

他の福音書は、苦難に向かう子ろばに乗る主イエスと政治的メシアを待望する民衆との落差を描いている。ルカ福音書はエルサレムの罪を嘆く主イエスを力説している。両方とも真実であるが、崩壊したエルサレム神殿の石が罪に苦しんで、叫んでいると受け止められる。人間は平和の道を、神の時をわきまえない罪を犯しながら、その実態に気づいていない。そこに、主イエスの大きな悲しみがあるとルカ福音書は伝えている。